

事例集に見る介護過程実践の実態と効果について

ーテキストマイニングによる考察ー

まるとケアプランセンター 主任介護支援専門員 杉田 貴行 (008282)

キーワード：介護過程、ケアマネジメント、テキストマイニング

1. 研究目的

介護過程とは根拠に基づいた介護実践であり、アセスメント・計画立案・実施・評価の一連の過程からなり、介護職の継続的に実践される対人援助である。その目的は、利用者の尊厳の保持と自立支援とともに、利用者が希望する生活を構築することにある。利用者の望む生活の実現を達成するための目標と、それに基づく根拠のある対人援助実践の内容が対人援助専門職からなる介護職チームで継続的かつ統一的に実践されるものである。

本報告は「令和2年度社会福祉推進事業 介護現場における介護過程実践の実態調査及び効果検証に関する調査研究事業根拠に基づく介護実践のヒント介護過程 実践事例集」に関して、行政機関の視点からの記述内容を整理し、見出されるものを検討した。

2. 研究の視点および方法

本報告では厚生労働省がホームページ上で公開している「令和2年度社会福祉推進事業 介護現場における介護過程実践の実態調査及び効果検証に関する調査研究事業根拠に基づく介護実践のヒント介護過程 実践事例集」（令和3年3月、全59ページ）をテキストとして用い、テキストマイニングの手法を用いて、行政機関の視点からの記述内容を整理し検討した。分析に使用する品詞として、「名詞」「サ変名詞」「形容動詞」「動詞」および「強制抽出名詞」を選択した。出現数40以上をデータとして採用し、テキストマイニングソフト KH Coder (Ver.3. beta. 03d) を利用して、対応分析、多次元尺度構成法（3次元）、クラスター分析、共起ネットワーク、自己組織化マップ、「介護過程」に関する一文内単語検索などの方法を用いて分析を実施した。なお、出現数が40以上でも他の語との結びつきがない場合は、自動的にデータから排除された。

3. 倫理的配慮

本報告は各行政機関により公表された個人を同定するデータが除去された統計データを基に分析を実施した。また分析は個人を抽出するのではなく集計値や記事から全体の傾向を対象とし必要な倫理的な配慮を十分に払い、データの内容の取扱いに関しては日本社会福祉学会研究倫理規程を遵守した。なお、本発表に関連して開示すべき COI はない。

4. 研究結果

今回のデータは、総抽出語数（使用）31,039(13,623)、異なり語数（使用）2,292 (1,824) であり、集計単位としてのケース数は文が 3,002、段落が 2,792、異なり語数(n)1,824、出現回数の平均 7.47、出現回数の標準偏差 28.54、文書数の平均 6.99、文書数の標準偏差 24.77 であった。

対応分析の結果から、「本人」「計画」「チーム」「支援」が、多次元尺度構成（3次元）では、「支援」「利用」「内容」「生活」が、それぞれ空間上の位置の中心に近いことが確認された。クラスター分析では、「実施」と「評価」、「事例」と「施設」、「支援」と「生活」などに関して、それぞれ結びつきのあることが確認された。共起ネットワークにおいては、「介護」「個別」「計画」などのつながりの強いことが示され、自己組織化マップでは、「内容」「基づく」「情報」「必要」などが同じカテゴリーにあることが確認された。さらに、一文内単語検索では、「介護過程」は「実践」「展開」などと結びついた文の構成が見られた。

5. 考察

本報告の結果から、介護過程とは、利用者自身がその人らしい暮らしが送れるように、抱えている問題点の軽減や緩和を目的とし、どのような介護を実践すればよいのかを考えていく一連の過程であることが確認された。支援する側が、その場の思いつきでケアを実施するのではなく、対人援助専門職の介護実践として、目的や根拠のある客観的に見て妥当性のある介護ケアを実践しなければならないことも推察された。利用者一人ひとりにどのような介護を実践しているのか、その過程を記録し省察することで、利用者の生活の質（QOL）の向上に結びつけていくことを目的としていることが認識された。そもそも、介護過程はなぜ重要なのであろうか。対応分析の結果から、そのケアが必要な理由を客観的に示す機能が存在していることも見て取れた。支援する側は、利用者の状態やニーズに合わせて意図的な対人援助を実践しなければならない。自己組織化マップの結果からは、実施された支援内容や提供する理由などの情報がないと、その支援内容に必然性があつたのかどうかを判断することが出来なくなってしまうことも予想された。つまり、それまでの経過を省察することも出来なくなってしまうことが危惧されるのである。証拠に基づいた支援を実施すると同時に、省察してその過程を言語化し記録に残し、専門性のある対人援助実践がなされていることを示せるようにするためにも、やはり介護過程は重要ということになる。

ところで、ケアプランとは介護サービス計画書のことで、介護支援専門員が作成する支援の方向性を決める計画書である。ケアプランは、利用者やその家族がより充実した生活を送れるようになるかということを考え、利用者にとって必要な介護サービスを組み合わせて作成される。介護過程での介護計画書は、個別サービス計画書や施設介護計画書などと呼ばれているもので、ケアプランとは内容が異なる。介護過程における介護計画書は、おもに介護職がアセスメントを実施し作成する。介護計画は、ケアマネージャーが作成したケアプランを基に、利用者一人ひとりにどのような支援を実施していくかを具体的に決めていくものである。共起ネットワークの結果から、アセスメントでは、利用者に関する情報を収集・分析して、利用者の課題を明確化させ、情報収集は、利用者本人や家族から話を聞き、利用者の行動や動作、性格などを観察することなどが推察された。また他職種やすでに提供されている支援の担当がいれば、そこから話を聞き情報を集め、集めた情報を基に利用者のニーズを明確化していくことも理解された。話を聞くだけでも不安やストレスが緩和して、受容や共感的理解により介護の負担を軽減できる場合も多いことから、利用者や家族の悩みを寄り添いながら相談に乗ることも、信頼関係の構築に不可欠であることが認識された。